

自立した主権者 をめざして



Vol.26 社会を形づくる常識

KEYPOINT

あなたは国葬・旧統一教会問題を周囲のひととどう話していますか？

SUMMARY

旧統一教会の問題は、いつの間にか「カルト宗教」の問題のみに焦点が当てられ、政治との癒着に関する事柄は「切り離す」という宣言とともに薄れつつあります。しかし、今回浮き彫りになった課題は、私たちの社会を誰がどうつくっているのかをはっきりと私たちに見せた形になりました。私たちはこの問題をどう受け止め、どうかかわっていくべきでしょうか

お知らせ

「がんばろう、日本！国民協議会」の機関紙 521号（10月1日発行）1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場をYouTubeチャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



日常という同調圧力

「生まれた時からそうであること」を私たちが疑うことはとても困難です。例えば、朝食の目玉焼きに家族全員が「醤油」をかけて食べてきたのに、ある日友人といった旅行先で自分以外が「ソース」や「塩」をかけて食べているのを見たら、何で？と思うでしょう。食べ物の好みならその程度で済みますが、日常の習慣や考え方を「疑う」ということは、まずそのことが一般的ではないという認識を持たなければならないため、気が付くまでに時間がかかってしまうのです。さらにそのことに気付いてしまうと、自分の認識と違う集団の中で異を唱えることの難しさに直面します。家族の中の同調圧力と闘うことは力の弱い子どもにとってはほぼ不可能な話に思われます。

今、旧統一教会（現・世界平和統一家庭連合）の問題をめぐる、特定の信仰などを持つ親の下で育った「宗教2世」に対する関心が高まっています。生まれた時から両親の信仰でつくられ

日常があるため自分も「自発的に信じている」思っているのに、そこに『信仰の自由がない』ということに思い至らないということや宗教活動の強制や幼少期からの継続的な恐怖の刷り込みは、自動虐待防止法で定義される「心理的虐待」に当たるのではないのでしょうか。

この問題はカルトと呼ばれる宗教だけでなく、いわゆる伝統宗教などであっても、ついてまわるものです。なぜなら、家族が信仰する宗教を否定することは家族という人間関係を抜きには考えられないため言い出しにくいという構図は同じだからです。親の言うことに異を唱えることは、親への愛を否定することと捉えられてしまうことがより問題を複雑にしていると言えます。年齢を重ねるほど、自分の慣れ親しんだ価値観や環境、人間関係を捨てることは容易なことでは無くなるため、子どもの信教の自由を守るための法整備、社会からの関りを強めていくことが必要です。

私たちの中に沈殿する宗教2世問題

こうした課題があるとはいえ、私たちのほとんどは日常的な信仰に対して疑義を感じていません。宗教2世の方たちが抱える問題がクローズアップされたことで、あらためて自身の信仰の問題点を考える、という人は少ないのではないのでしょうか。周囲の人とこの話題について話すときもほとんどが「噂話」程度になってしまいます。

しかし、「生まれた時から家族がつくってきた日常を受け入れて育つため、『そこに自由がない』と

「**いうことに思い至らない**」ことは、宗教に限らず、私たちの周囲に存在する問題です。

例えば、「男性が外で働き、女性は家で家族を支える」こと、「親の介護は当然子どもが行う」こと「中小企業よりも大企業への就職が成功であるという評価」。さらに言えば「性自認」「学歴」「障がい者」「貧困」・・・社会にある様々な問題はみな、「**生まれた時から社会が作り上げてきた「常識」を強制的に受け入れ、そこに疑問を持つということに思い至らない**」という同質の原因を持っているのではないのでしょうか。さらに、異を唱えることは周囲との人間関係を崩すことにつながり、声をあげる勇気を持つことが困難であり、環境を変えようとするときに周囲の理解や経済的な支援がないため、抜け出すことができないという点も、宗教 2 世の問題点と重なります。

つまり、宗教 2 世の問題は、私たちの問題であり、宗教 2 世の問題がおこる要因を探ることは、私たちが社会で抱えるそれぞれの問題の解決の糸口を探ることと同じことなのです。

「政教分離」は政治と宗教団体との関係性だけ？

そのように考えると、旧統一教会と政治との癒着問題も「**信教の自由**」や「**票集め**」といった単純な話ではなくなります。国家が宗教と一切の関わり合いを持たないということは不可能ですし、政治家一人一人の宗教観や宗教上の活動を否定するものでもありませんが、今回の問題は、いわゆる「**政教分離原則**」について、「**政**」が政治家では

なく、「**政府**」であると考えする必要があります。政府とは、国家における統治機構の総称です。この統治機構とカルトとよばれる宗教団体が深い関係をもっていたということが何を意味するのか。

私たちが「**日常の常識**」と刷り込まれる社会全体の風潮や傾向が、**疑問を持つことに思い至らない**中で特定の意思によって左右されていた可能性があることが問題なのです。

社会をつくるのは結局私たちです。私たちは生活のリスクと無関係に生きていくことはできません。どのような社会を望み、そのためにどのような政治家、どのような政府を選ぶのか。社会に蔓延する様々な問題を自分が感じる生きづらさに置き換えて考えましょう。自分にも同様のリスクが起こった際のダメージについて想像を巡らせ、自分の問題を社会の問題としてとらえる。他人事と放っておけば、それは、結局のところ、自分自身の境遇へと直接跳ね返ることになるのです。

〈機関紙「日本再生」No.521の内容〉

2022/10/01 発行

「国葬」から見る私たちの民主主義の現在地、そして直視すべきこと ● 3-7 面/コラム/一灯照隅 ● 8-11 面/インタビュー/沖縄・統一地方選/佐藤学・沖縄国際大学教授 ● 12-15 面/インタビュー/台湾海峡の安全保障環境/佐橋亮・東京大学准教授 ● 16-19 面/インタビュー/ASEAN の視点を軸に/大庭三枝・神奈川大学教授

※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

- ・あなたは「旧統一教会問題」について周囲の誰かと話をしましたか？
- ・あなたの「常識」を疑ったことはありますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「**国民主権の発展**」「**人づくり**」「**がんばる日本と日本人を回復する国民運動**」「**自由・民主**」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。